



作文2部

ぜんこくのうぎょうきょうどうくみ あいちゅうおう かいちようしよ
全国農業協同組合中央会会長賞

管理栄養士「菜生」

にいがたけんじようえうきようくだいがくふぞく
新潟県上越教育大学附属小学校五年

いひだ なお
池田 菜生

「ばあちゃん、ちゃんと食べてる？」

大阪で一人ぐらしをしているばあちゃんに電話をする時、私が決まって言う台詞です。一人だから面どうくさいとか、おなかへへらないからほしくないとか、じいちゃんがなくなつてからのばあちゃんは、大好きな料理をあまりしなくなりました。

今年の春、四年ぶりに大阪のばあちゃんに会いに行きました。電話ではいつも「しっかり食べとるで。」と言っていたのに、四年ぶりに会ったばあちゃんは、私と同じくらいの身長になつていて、私をおぶつてくれたせ中がとても小さく見えました。

「ばあちゃん、せがちぢんだんじゃない？」

そう言う私に、ばあちゃんが、
「ばあちゃんは昔の人だから東京タワー。あんたはわかいけんスカイツリーだわ。」

と言つて、みんなで大笑いしました。

次の日、仕事に出かけるばあちゃんに、ちゃんと弁当を持って行っているか聞いてみました。弁当を見せてもらつと、ばあちゃんが作った小さいおにぎりが一つと、少しのおかずしか入つていませんでした。そこで私は、ばあちゃんにもう一つおにぎりを作つてあげることにしました。私のおにぎりを見たばあちゃんが、

「バクダンみたいなおにぎりやな。」

と、おどろいて言いました。

「このくらい食べないと、私がばあちゃんをおんぶしないといけなくなるわ。」

四年前は、私がばあちゃんのおにぎりを「バクダンおにぎり」と言つて、一個食べ終わるとおなかのはれつしそうになる「きょうふのおにぎり」だったのに、今年は私のおにぎりがおどろかせました。おにぎりの大きさと、会えなかつた時間の長さを感じました。ばあちゃんがしっかりお昼ご飯を食べるように、弁当箱を少し大きくすることにしました。私は、試しに新しい弁当箱におにぎりとおかずをしっかりとめて食べてみました。

「これならばばあちゃんも食べられる。」

そう思つて、私はお弁当プレートを作ることになりました。弁当箱と同じ大きさの箱を作つて、同じ大きさのおにぎりを新聞紙で作つてつめて、アルミカップの中に折り紙で作つたおかずを入れました。これを毎日見ながら、同じ量の弁当を作つてもらおうと思つたからです。仕事から帰つてきたばあちゃんに見せると、「これは大変な栄養士さんに見はられた。」と、笑つていました。

今でも、ばあちゃんは週に二回は「しっかり食べると、力が出るな。」という言葉と一緒に、プレートと一緒にとつた弁当の写真を送ってくれます。自分のためだけにご飯を作ることで、少しでも「楽しい」に変わつてくれたらうれしいです。

「ばあちゃん、しっかり食べてね。」